

発展しております。これも役員各位のご努力の賜物と感謝いたします。

## この8年間を振り返って

徳田 雅子

(大阪府立母子センター図書室)

「病院図書室に司書は必要か?」、私が母子センターに初めて関わりを持った時に最初に医師から質問されたのがこの言葉でした。当時の私は、学校図書館司書でしたから「病院」と「図書室」のイメージがつながらなくて返答に困ったものです。

その半年後に母子センターの図書室で働くことになったのですが、ここで与えられた最初の課題が「キンビョウキョウに入会すれば文献サービスを受けられると聞いたので入会したい」というものでした。その会について手がかりが何もありませんでしたので、桃山学院司書講習事務室を通じて大阪赤十字病院図書室を紹介していただき、その司書の方に案内されて住友病院医学図書部を訪問しました。これが病図協との最初の関わりであり、住友病院で見聞きした病院図書室の概要がその後の母子センター図書室の目標となったわけのです。

病図協加盟後は研修会には欠かさず出席し、そこで入手したノウハウは当図書室なりに加工し、実践させていただいています。その中で一番印象に残っているのが故朴木貞子さんの「作業に必要な時間と経費を数値化し、記録することが大切だ」という言葉でした。新人の私には、それが何故なのかよくわかりませんでした。それから数年後、学院図書室との兼務やオンライン検索の導入などで業務量が増え、未整理資料が山積みとなっていく日々の中でやっとあの言葉が理解できました。そして1988年11月、埼玉県立こども病院の司書の方が当室を訪問されたのをきっかけに、作業時間を綿密に計算し、増員をお願いするため上司に日参し、ようやく理解を得ることができました。

「忙しい」の言葉だけでなく、数値がものをいったのだと思います。はじめの問いかけから8年、今なら迷うことなく「病院図書室に司書は必要です」と答えられますし、さらに「病院図書室には病図協の協力援助が絶対に必要不可欠です」と言えるようになったと思います。

今後、協議会加盟機関は単に文献サービスを受受するだけでなく、病図協の事業にもっと主体的に参加して、自館を含めた全国的な病院図書室のレベルアップに力を注ぐべきだと考えます。

## 事例発表を行って

### — 滋賀の市立病院図書室 —

吉川 信子

(市立長浜病院図書室)

「協議会設立15周年おめでとうございます。」と一言で済ましてしまうのが申し訳ないほど役員の皆様方には大変な15年だったろうとお察しいたします。私達会員が自信(チョッピリですが)を持って仕事に取り組めるのは、主軸である病図協があるからこそ感謝の気持ちで一杯です。今後ますます発展をするよう、私達地方の者もお役に立ちたいと思っています。

さて、私は第42回研修会で「滋賀県下の市立病院に於ける図書室の立場」と題して事例発表をいたしました。これは、県下5つの市民病院にアンケートを依頼し、それと病図協で実施した全国アンケートの中から他府県のいくつかの市立病院のデータを抽出して比較検討したものです。その結果、5つの県下市立病院では担当者が専任はおろか、兼務ともいえない状態で、別の仕事のほんの片手間に図書の仕事をしていることがわかりました。他府県では専任1名なのに、県下では0と、あまりの差に悲観したものです。また、図書室面積は他府県よりも広いのに蔵書が少なく、1人当りの図書予算も他府県100に対して、県下65というものでした。つまり、施設面での条件に恵まれながらも内容がないという矛盾した実態が明らかになったのです。